
しあわせ荘の日常

五月蓬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しあわせ荘の日常

【Zコード】

Z0957X

【作者名】

五月蓬

【あらすじ】

幽霊が見えちゃう新高校生、遠野真とおのまことが守護霊と共に上京してきて暮らす事になったのは『しあわせ荘』！

曰くつきの其処はなんと、妖怪が集まるアパートだった！？

ツンデレ（？）な天邪鬼少女。合法口りな三十路の座敷わらし管理人さん。日本文化をこよなく愛する留学吸血鬼。人に恋する九尾の狐。

その他色々な変わり者の妖怪達が繰り広げる、非日常系日常ストーリー！

その一『しあわせはくふうじや』（前書き）

注意

この物語はフィクションですよー。実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね

その1『しあわせ荘へようこそ』

今年から越戸高校の一員となる彼、遠野真は幽靈が見える「ぐく普通の男子中学生であつた（幽靈が見える時点で普通じゃないよね？）といつツツ」コミは華麗にスルーである）。

日頃幽靈、『死』という貴重な経験をした人生の大先輩（生きていのに人生とはこれ如何に）から、諸行無常を常に学んだ真少年は非常に大人びた、というよりもどこか生き急いだ少年であつた。

人生いつ終わるか分からない。だからやることは早くやらねば。

そんな人生観が、彼の進路を決定づけた。

東京は夢の舞台……

日頃、幽靈達の話を聞いて、彼はそんな幻想に囚われていたのだ。一刻も早く、少しでも永く東京で過ごさねば！そんな感情が彼に上京の道を選ばせたのだ。

ちなみに真の両親も『見える人』だ。だから真の気持ちをすぐに理解した。

『刹那に生きろ真ッ！』

半分透き通つた眞の父の口癖である。

そんなこんなで、なんだかんだで、問題なく成績優秀な真は、学

校から、両親から、後押しかれるよつとやうつと簡単に東京の高校へと向かつたのである。

「多分この辺りだよなあ」

『『ぽいな。お、あれじゃね？』』

春休み、陽気な昼下がりに真は最低限必要な荷物をキャリーバッグで引きずりながら、地図を片手に東京の地を歩いていた。守護霊のヒカル（中々の色男である。しかも強力。真のステータスを底上げしている多才な男だ）と共に、彼（彼らからしたら『彼ら』）がこれから拠点とする東京の城、『しあわせ荘』を探しているところであった。

見えてきたアパートはその『しあわせ荘』というほんわかした名前に似合つた淡い色合いの壁面が綺麗な穏やかな印象の、こじんまりとした建物だった。圍う石の塀の空いた場所、その入り口脇には少し雨風にさらされぼろつとした『しあわせ荘』と書かれた木札。その入り口から覗き込み、真はほほうと声をあげた。

「東京なのに金ピカじゃないのか……」

『『ちよつ……お前東京を何だと思ってんだよ…』』

「東京の住宅は全部金ピカだと田村のじいさんが言つてた」

『『ばつか！それは京都だろ！言わせんな恥ずかしい！』』

京都もそんな場所ではない。

二人はそんな会話を交わしつつ、一步、しあわせ荘の砂の敷地に踏み込んだ。

「とても日くつきには見えないな」

『だが、不動産屋は言つてたぜ？それにこの安さだしな。何もないわけはないだろ』

一人の語るその通りに、実はこのしあわせ荘、日くつき物件として格安家賃で紹介されたアパートである。

何や『出る』らしいですよ、との話だった。

まあ、『見える』彼からしたら、ただの格安アパートなのだが。そんな理由で、「別に高層マンションでもいいのよ？」と、幽霊の加護という名の裏技で金の浴槽に浸かっているような刹那に生きる母の好意をはねのけて、真はこのアパートを選んだのだ。

しかし思いの外、悪靈的な悪い気配はない。

想定外の事態に逆に感づ真に、ふとその声は降りかかった。

「あれ？もしかして、今日越してくる遠野さんですかー？」

しあわせ荘の敷地内の色とりどりの花が並ぶ花壇の前で、じょうろ片手に立っているその小さな女の子は、透き通った可愛らしい声で真に向けて手を振つた。

くまの刺繡が施された、少し大きめな可愛いエプロンをゆるゆる揺らしながら、小学校低学年くらいの少女は、やつぱりくまの装飾があるサンダルをピロピロならしながら駆けてくる。

何処かの娘さんかな？

微笑ましいと、真はにっこり笑って、わらて敷地に踏み込んで、腰を曲げて少女に挨拶をした。

「さうだよ。僕、遠野真。よろしくね」

目の前まで寄ってきた少女は、眞の挨拶にはあつと顔を明るくして、眞と同じくにっこり笑った。

「初めて！私、管理人の藁蘂^{わらじ}菊子です！種族は『座敷わらし』です！これから宜しくお願ひしますね、眞くん！」

……いま、なんて言いましたかねこの子？

管理人？座敷わらし？あ、そういうまま」とかな？

眞は笑顔を凍り付かせて、固まつた。思考停止である。

「えーっと……眞くんは種族はなんですかー？一見、人間にしか見えませんけど……」

「はは、そりや人間だよー」

眞は至つて真面目に返したのだが、菊子はあははと笑い出した。

「あはは！眞くんは冗談が面白いですねーー。」この噂を聞いてきたなら、妖怪だつてまるわかりですよーー！」

……妖怪？

尚も首を傾げる真。そんな彼に、状況を理解させたのは、長年の相棒、守護霊のヒカルだった。

『あー！なんが覚えのある気配だと思ったら、そつか、妖怪かあ！おい真、田の前の、妖怪座敷わらしだぜ！珍し！』

真は暫くの間沈黙を保ち、そしてようやく口を開く。

「よ、妖怪～～～！？」

真の叫びが東京に響く。

其処から、真のしあわせ荘での奇妙な東京ライフが始まった。

その一『しあわせ狂へゆひ』（後書き）

はいすみません。いろんな始めちゃいました（－－－）メインで書いてるものがありますので、しあわせは完全不定期の気紛れ更新となります。

ところのも、最近環境が変わりまして、外出することができてきましたのです。

携帯からなにか活動したいなあ、と思ったのですが、メインでやつてるのは長くて携帯じゃ一苦労。

其処で一話千から三千文字程度の、短めの小話のよつなものを息抜きがてらにやつてみようと思つたわけです。空いた時間にさわつとできるよつな。

そんなわけで、しあわせは完全不定期の気紛れ更新となつております。本当に空いた時間にしかできません。

そんな気紛れ作品ですので、気軽にお付き合いでいただけたらなあと思つております。内容も簡単なので、そのうち用意する人物紹介を読めばどこからでも読めるかもしません。

そういうと気楽な作品が目標。凝った設定はなし。

それでもよひしかつたら是非お付き合いで……

その2 「座敷わらじのまつり」（前書き）

注意

この物語はフィクションですよー。実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね

その2 「座敷わらしのわいわい部屋」

『しあわせ荘』。其処は妖怪が集う場所。

管理人は『座敷わらし』の藁筵菊子さん。
わらじべやくじ

「まさか噂を知らないで来ちゃつなんて……びっくりしましたよー」

とっても小さな女性、見た目は完全に小学校低学年である。とても小さくて童顔。ぴしっと切り揃えた髪がまるで人形のよう。やたらとくまが好きなのか、Hプロン、サンダル、じゅうぶ、手を拭くハンカチ、その身の回りのもの全てが可愛いくまの装飾つき。とにかくにも本当に見た目は子供である。

しかし驚くことなれ。菊子さん、いつも見えて三十路である。

真もにわかには信じられず、怪訝な表情を見せたが、慣れているのかするじとポケットから取り出した（やつぱりくまのイラスト入りの）財布の中の免許証を見せた菊子さん。どうやら三十歳というのは本当らしい（よく免許とれたものだ。本当にアクセルブレーキ踏めるのだらうか？）。

財布をしまいながら、「よく間違えられるんですよー」とこり笑った菊子さん。さらに「座敷わらしの私の家系は代々童顔なんですよー」と菊子さんは言つた。

童顔とかいうレベルではない。真は心の奥底にその言葉を封じ込めた。

「『曰くつき』、と言えば大体の人は来ないものなんですよー。そもそも、『曰くつき』という用語自体が『妖怪住宅』の隠語で通つてますからねー」

「そうなんですか。東京つてす』いなー。妖怪が普通に暮らしてるのが」

真はふむふむと感心して頷いた。守護霊ヒカルも『流石は東京』と感心氣味である。そしてヒカルは珍しそうにまじまじと座敷わらしの菊子さんを見つめた。

『真。知つているか?『小五』と『口リ』、一いつの文字を足すと『悟り』になる。これはとても有名な方程式だ』
『え? 小五と口リ? おお、『小』を左に、『五』と『口』を右に、そして最後に『リ』を添えれば『悟り』だ! これはす』い』
『だが、それに手をだした人間は今の時代は犯罪者だ。これは現代人が『悟り』には至れないという皮肉の意味が籠っている』
「そ、そつなのか」

ヒカルの講釈にふむふむと頷く真。ちなみに、二人は声を発していない。守護霊はその憑いている人間と心で会話が出来るのである。だから決して菊子さんの前で『小五口リの方程式』の話をしている訳ではない。

『だがな、真。『三十路』と『口リ』だと……どうなる?』
「『』、『』くつ……どうなる?』

鬼気迫るヒカルの語りを前に、真はつばを飲み込んだ。

『……それだと犯罪じゃないんだよー。』

「な、なんだつてーー！」

驚きつつ、真は背後のヒカルに肘打ちした。

『ぐふう』

「お前の女好きに付き合つつもりはない」

『ちつ。折角の新属性、合法口りを……』

『『悟り』のくだり、いらなかつたよな』

ちなみにヒカルは無類の女好きである。守備範囲は振り篭から墓場まで、人間はもちろん幽靈妖怪動物なんでもござれの超広域に及ぶ。自称プレイボーイである。

さて、と。いや、さてでもなんでもないのだが、勝手に話を仕切り直して、真は菊子さんに尋ねる。

「それで人間の僕が入っちゃって大丈夫なんですかね？」

「それは真くんの決めることですよー。私の言つ心配は、妖怪と一緒にで不安じゃないですか? って心配なのです」

「大丈夫です。慣れていますから」

悪靈とかと取つ組み合いの喧嘩をしたことがあるから、多分妖怪とかでも大丈夫だろうと真は思う。それに菊子さんの穏やかさを見て、妖怪というものを甘く見ている節もある。そして何より、妖怪という東京文化に興味をもつたのが大きかった。

「あはは。真くんは面白いですねー」

菊子さんはにっこり笑った。菊というより向日葵である。

「まあ、此処でお話もなんですし、お部屋に行きましょーか！」

「はー」

「ピロ、ピロと音を立てて菊子さんは前を行く。なんで子供用の音が鳴るサンダルを履いているのだろうと真はどうでもいい疑問を抱いた。ちなみに何かの伏線だつたりはしない。鉄の階段をカクカクピロピロ上がる菊子さんに続き、真は階段を登る。気のせいか、階段の感覚が狭い。菊子さん基準？」

「まつじとくらのむつへや～ほに～ある」お～　お～ある」お～
の～まつじおとくらん

「なんですかその歌」

「えへへ～」

「とてもこの人が大人には見えないのは氣のせいだろうか？」と真は謎の歌を口吟む菊子さんに疑わしい目を向けた。

階段を上ると201号室がある。そこから奥へ向かうにつれて、部屋は202、203と連なってこそ、端っこは206号室。つまり、奥から一番奥の部屋が眞の部屋となる。

がちやつ。

201号室を通り過ぎた頃、202号室の扉が開いた。

『おお』

ヒカルが感嘆の声を漏らす。がちやつと鍵を閉めて出てきたのは長い金髪を垂らすびっくつする程に色白な女性。何故か巫女のように

な装束を纏っている。女性は真もびっくりする程綺麗だった。

「おー、やつら。どうした？」

「さんさん」んにちは。新しい入居者さんですよー」

そか。たと出かけるでな、急ぎじゃ、挨拶はまたの「

若い女性ばかりと真面目を呑わせ、微笑を浮かべると、三十路の菊子さんの頭をぽんぽんと撫でて、やがて階段を降つていった。

に」に「手を陰にてしる葉子せんに眞に累ねぬ

「アカウント登録」

「せこ、かわすかせー。『かへりて』に『じりづ』に『じやないですか

うんですね~

「自分の名前噛むんですか?」

「はい、真くんの時は成功しましたけど、いまのしれんの時は嘘
んじやつて……それから『わい』って呼ばれます。真くんもそ
う呼んでいいですよー？」

「はい菊子さん」

真は普通にやつ呼んだ。悪戯のつもりもなく。しかし菊子さんは
しょんぼりしてしまった。

「.....也々也々」

ぱあつと向日葵が帰ってきた。まるで子供である。

再び歩を進めると、タイミングよく開く203。出て来たのは学

生服の少年。その幼頃の割には背が相当高^{たか}い。少なくとも真以上である。あつこさんと並ぶと父と娘のようだ。

「あ、あつこちゃんちかせ……」

「だいくんこんにちはー。おー出かーけでーすかー？」

「はい。部活なんで……」

でかい少年は軽く皿を伏せ（真から皿を逸らして）横を通り過ぎる。通り過ぎ様にあつこさんの頭を撫でて。

「……」

「こつてひつあーこー。」

咲ひ足りずのあつこさんのお見送り。それを見ながら真は思つ。

なんでもみなきつこさんの頭撫でてへる……？

扱いがまるで子供である。

「あー、だいくんはひみつじがらみもひだかじ仲良^{なまこ}にしてあがへく
ださいね？」

「仏教？」

『不器用じやね』

「だ、だよな。いきなり仏教徒がでてくるわけないよな

「真くん？」

「あ、はい大丈夫です」

「良かつたー」

嬉しそうに笑い、あわいわわせルルル歩く。今度は部屋から誰も出て来ず、やつと205号室。

「ノリですよー」

ハーロンのポケットからぶらり やよいに鍵をあたふた取り出して、がちやうとその扉を開くやつわん。

セレセレハハハ、セレセレ小綺麗な部屋が姿を現した。

「毎日お掃除してましたので綺麗でしょ？お荷物はそれだけですか？」

「あとでまた匾をます」

「やつですかー。じゃ、ひとつあえず何かあつたらひいてくださいねー」

よじよじと真を部屋に押し込み、きつわんは笑う。

真は振り向き、入り口前に立つやつわんを見た。

「はー。ありがとうござります」

やうやうこいつ、真はきつわんの頭を撫でた。

……年上に何してんだ俺！？

ノリでやけにかしちまつた真はあたふた慌てて謝罪する。

「ハ、ハめんなさ」

言ひ掛けて、真は満足げに微笑むきつゝせんに気付く。せつこさんは嬉しそうに撫でられた辺りをさすつながら、ペロペロヌキシップで去つていった。

「…………子供かつ」

管理人さんである。

その2 「座敷わらじのあひるや」（後書き）

（本日の現代妖怪辞典）

【座敷わらし】

幸せを運ぶ見た目子供な妖怪さん。歳をとつても見た目が子供な童顔種族。かつては人間に有難がられたが、気付けば感謝も少なくなつてすっかり独立。幸せ妖怪だけあって、お金回しはお手の物。指先一つで億万長者な座敷わらしも結構多い。悪戯好きだつたりもうるけど、基本的には子供のように純粹。でも、最近腹黒な子も多いとか。時代の流れって怖いですね。

これは現代妖怪辞典です。実在の妖怪とは何ら関係はありません。
本当の座敷わらしはこんななんじゃないよ！

座敷わらじのきつこさん。格安で妖怪に住居を提供する優しい管理人さん。頭を撫でれば喜びます。

その3『天邪鬼の瓜子さん』（前書き）

注意

この物語はフィクションですよー。実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね

その3『天邪鬼の瓜子ちゃん』

取り敢えず荷物を置いて、真はふむ、と胡座をかけて腕を組む。

「さて、これからどうしたものか」

『荷物整理は?』

「いや、それはぱぱっと終わらせるが、問題はアレだ」

『あれ?』

「『近所挨拶だ』

真は生まれてこの方引っ越しなどしたことがなかった。ちなみに彼の両親も同様である。故にその時の勝手がいまいち分からぬ。

「どうしたものか」

『適当にアパートの部屋全部回ればいいんじゃね? 大した数もないし。それでよろしく~とでも言つとけ』

「それでいいのか?」

『それでいいんだよ』

「何か粗品でも持つてかなくていいのか? 失礼じゃないか?」

『失礼じゃねーっての。いいか? こういうのが人付き合いのテクつてもんよ。こういうのは物なんて持たないで回るんだよ。その時に笑顔でよろしくと返してくれる人は良い奴だ。積極的に付き合え。この時に『土産もねーのかコノヤロー』みたいな顔をするのは嫌な奴だ。そいつからは嫌われて丁度いい。付き合つな』

守護霊ヒカルの不安残るアドバイス。真は疑わしい目を背後に向

ける。

「そんなの許されるのか？ 感じ悪くないか？」

『大丈夫大丈夫。俺を信じろ』

ヒカルは適当にそう言った。ちなみになんの根拠もないことなのは、ヒカルの胸の中にだけある秘密である。しかし、まあ、こんな守護霊でも、恩恵を大いに受ける真にとつては大きな存在。彼はまんま彼の言葉を信じる事にした。実際に騙されながらも自体が良い方に転がる事が多いのが尚更彼の信頼を築いていた。

「よし。じゃあ、荷物が届く前にぱぱっと挨拶行くかー」「いけいけー」

適当なヒカルの後押しを受けて、真はよつこいしようと腰を上げる。ちなみにヒカルの人付き合いテクニックはなんの根拠もないことなので、間に受けていけません。正しい礼儀作法は、しつかりとした大人の人に聞きましょう。

真とヒカルは205号室の扉を出る。そこできつこさんから鍵を貰つてないことに気付く。しかし、まあ挨拶がてらに行けば良かるうといつた軽い感覚で部屋をそのまま出る。挨拶回りなので、其処まで時間を取らないだらうといつ算段だ。

そして二人は、まずはお隣、一階の端っこ206号室のインター ホンを鳴らす。しかし、反応は無い。留守なのだろうか、と二人はすぐさま諦めて、204号室へと向かう。実際に既に202号室と203号室が留守なのは分かつている。まあ、みんな暇ではないのだろうと特段不自然には思わない。

続いてお隣204号室。ヒカルの『お隣さんは多少丁寧にな』と
いう助言をしつかり受けて、大して「ミニアニケーション嫌いでもな
いそこのフレンドリーな真は躊躇いもなくインターホンをぽちつ
と押した。ぴんぱーん。

がちやり。はい。どちら様でしょうか。

「隣に越してきた遠野です。」挨拶に参つましたで、『おこ真一』やるせやめりー。』

「おはようございます」

「え？ 東京の標準語つてこうじやないのか？」

『あれは冗談で言つたんだ！間にうけんな！

「二、第三回」

誤魔化せ！

このやり取り、僅か0・2秒。なんで変身中に攻撃されないので？

גַּדְעָן, עֲמִילָא, רְבָנָה

『誤魔化せてない！』

は、はい、今出来ます。

「二、第三回の題材」

『お前が馬鹿なのが悪い！』

がちやり、と扉が開く。インターほん側には『天野瓜子』あまのうりこと名前

顔を覗かせたのはひとりの少女。見た目、真と同い年くらいの女子だ。

「……」

無言である。黒いセリロングヘア、化粧もしてない飾りつけのない女の子。じろりと睨むその瞳は鋭く気の強そうな印象を与える。扉の僅かな隙間から見える僅かな情報である。まるで警戒するかのように、女の子は扉を僅かに開いてじろりと目を光らせていた。

「あ、あのー。ほんとうは。遠野真です。今年から高校一年になります。よろしく」

真は年が近いと予想してか、少し柔らかく挨拶した。すると女の子はぎらりと目を光らせて、バタン！と勢い良く扉を開いた。

「べ、別に年が同じで、しかも同じ高校に通うことになる子が隣に越してくると知つてたから、友達になれないかなあ、とか、ワクワクしてたわけじゃないんだからっ！」

……な、何を言つているんだこの娘は？

真は『ぐりと息を呑んだ。

ぱつと姿を現したのは、びしつと制服を着こなした女の子。セミロングヘアのてっぺんには、なぜかちょんまげのよつにゴムで纏めた毛がぴょんと立っている。結構細身、スレンダー。ヒカルはやつぱり『おお』と声を漏らした。

『いいじゃないか。ちつと芋臭いが、いいじゃないか。スカートとニーソの間の絶対領域がいいじゃないか』

「なんでこの人は制服を着てる?それになんでかお前が来ることなど楽しみではなかつたみたいな宣戦布告をされたぞ」

『ふつ。分かつてないな真。これはあれだ。「シンデレ」だよ』

「つんでれ?それも東京文化か?」

『ああ。東京文化だ』

なるほど。東京では出会い頭に宣戦布告をするのか。と真はふむ、と頷く。東京文化はよく分からぬ。

「」期待に添えず申し訳ありません」

「え?え?べ、別にそういうつもりで言つたんじゃないけどっ!ま、まあ仲良くするのはまんざらでもないかな~なんて……」

「え?仲良くしてくれるんですか?」

「仕方ないからだけどっ!」

何故、この娘はやたらと此方のことに何かこじりなしか逆らつているのか?嫌われた?と真は少ししょんぼりする。

「あ。真ぐーん。そういうば鍵渡し忘れて……あれ?」

ドアの前に立つ真に、鍵をちゃりちゃり言わせながら、ピロピロとやつてくるのは管理人のきつこさん。きつこさんはドアの前に仁王立ちする女の子を見て、にっこり笑つた。

「あー、瓜子ちゃん、早速真くんと仲良くしてるとんですねー。よかつたー」
「き、きつこさんー?べ、別にいきなり馴れ合いつもりなんてないけどっ!」

「真くん、瓜子ちゃんは天邪鬼さんだから素直じゃないけど、とってもいい子ですよー。仲良くしてあげてくださいね?」

「天邪鬼？」

それも妖怪なのか？というより、このアパートの住人が妖怪ばかりだと今更思い出した真。余りにも人間っぽい人ばかりなので忘れていた。

目の前の普通の少女が妖怪？天邪鬼？なんだそれ？そんな感じで首をかしげる真に、ヒカルの助け舟。

『天邪鬼つてのは要はツンデレ妖怪だよ。なんでも反対の事を言いたがる捻くれものだ』

「そうか。さつきから言つてるのは習性なのか」

勝手に納得して、真はほつと一安心した。ちなみに天邪鬼はツンデレではない。ツンデレの定義はその手の道の人聞いてみよう。

「まあ、でも良かつたよ。同じ学校の人が近くにいて。東京に来たばっかりで不安だったからさ。迷惑かけるかもしれないけど、よろしく。良かつたら友達になつてくれないかなー、なんて。迷惑かな？」

真は頭を下げる。すると、瓜子はむつと口をへの字に曲げて、胸をぐいっと逸らしてみせる。

「迷惑なんかじゃないけどーーと、友達は居たつて困らないでしょ！」

瓜子はぽわつと頬を赤くしてふんと鼻を鳴らした。素直じゃないというか、何かよく分からぬ子である。しかし、悪い子ではないな、と真はほつと一安心して微笑んだ。

「これからよろしく」

「よ、よろしく」

「じゃあ、僕、これから挨拶回りに行くんでこれで」

「え? もう行っちゃうの?」

「ん?」

「え、う、ううん。なんでもない……」

「じゃあ、また後で」

真はひらひらと手を振つて、きつこさんと話しながら204号を離れていく。ぽかんとドアの前に立ち、それを見送った瓜子はばたりとドアを閉じ、背中を寄りかけむすつと口を尖らせた。

わざわざ同じ高校アピールの為、どんな格好が恥ずかしくないか分からないので越戸高校の制服を着込んだ。胸ポケットから会話の内容を予想して纏めたメモ帳を取り出しパラパラ捲る。一切、記載した台本の台詞を言えなかつた。

部屋の奥、ちゃぶ台に置いたお菓子。沸かしておいたお湯。それら全てに意識をまわし、へたりと瓜子はしゃがみこむ。

「お茶くらい飲んではいけないのに……」

しかし素直にやつは言えないのが妖怪天邪鬼なのである。

その3『天邪鬼の瓜子さん』（後書き）

（本日の現代妖怪辞典）

【天邪鬼】

何にでも逆らうシンデレ（？）な妖怪さん。鬼なので角が生えているようです。でも、最近は角も退化してきた天邪鬼もいるとか？何かと人と反対の意見を言うし、素直な気持ちを言えないで誤解されがち。だけれど基本、純粋な人（鬼？）が多いのです。鬼だから勿論腕っ節は強い。そして人を引き込む妙な魅力が能力だそう。その本心でない言葉に乗つて、失敗する人もいるとかいないと。でもそれは自分の責任ですよね。自分の意思はしっかりと持ちましょう。

これは現代妖怪辞典です。実在の妖怪とは何ら関係はありません。本当の天邪鬼はこんなんじゃないよ！

天邪鬼の瓜子さん。少し素直じゃないけれど、本当は優しい良い子ですよ。一人暮らしの新高校生です。

その4『吸血鬼のシャルル氏』（前書き）

注意

この物語はフィクションですよー。実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね

その4『吸血鬼のシャルル氏』

204号室の挨拶を終えて、一応203、202とインター ホンを鳴らしてみる。しかし、やはりしろさん、だいくんという二人の住人が出て行つた部屋は留守^{すら}しき。どちらも一人暮らしかど、ふむと勝手に納得する。

仕方ないと真が次に向かうのは201号室。二階の最後の部屋である。

「え、英語？ ちや、ちやーるず……んん？ ヒカル、読める？」

『無理』

何と名前は英語？ らしい。外国人さんかと真とヒカルは『ぐくりと息をのむ。ちなみに一人とも日本人。英語とかは、教科書英語しか分からない人達である。日本の英語教育は全く……英会話のが重要だろうよ！』と、道で出会つた外国人さんに話しかけられて答えられない、国の教育のせいにしちゃう程度に英語とか話せない人である。

に、日本語通じるかなあと不安になる真。ちなみに鍵を渡して満足したのかきつこさんはとつとと降りて行つた。ちゃんと別れ際のいい子いい子は忘れない。

「……と、とにかくやるつきやない！」

『おお！ お前勇者か！』

「大丈夫！ ボディランゲージでいける筈！」

『通用しないつて歌つてる歌があつたな
「い、いいからいぐぞ！多分、日本に住んでるから多少はいける筈
！」』

真は意を決してインター ホンを鳴らす。

ぴんぽーん。

ハーハー、どちら様デスカー？

片言だが日本語である。真は少しだけほっとして声を発する。

「今日205号室に越してきた遠野です」

アーチョト、待つてクダサイネー！

がちゅり。

どびどびどび。

ギイ。

ドアが開いた。姿を見せたのは、やっぱりバツキンの男性だ。何やら整髪料で髪をオールバックで固めており、色は白い。中々凜々しい顔立ち、高身長のスタイル抜群。しかしそんな事よりも特徴的なのは、その真っ赤な瞳と何故か着る青い浴衣。何故、浴衣？お祭り気分？

「ハーハー！ハジメマシテー！ワターシ、シャルル言いマス！」
シャルル シュヴァリエ。シャルルと呼んで下サーイ！

チャールズじゃなかつたのか……と一安心の真。かなりフレンドリーな印象のシャルルに、真はほつと一息ついて挨拶した。

「遠野真です。今後ともよろしくお願ひします」

お辞儀。すると、「オーヴー」と拍手するシャルル。

「イツ、ジャパーーズ、ドゲザ！」

「ど、土下座じゃないよ！お辞儀だよ！」

「ハイ！ハクシユ、ハクシユー！」

「あ、は、はい……」

手のひらを前に差し出したシャルルに、戸惑いながらも真は手を叩く。

ぱぱぱぱ。

「ノンノンーそれはアクシユ、ネ！ハクシユー！」

あれ？と真。この人、握手と拍手間違えてないか？と一応手を前にだす。するとギョッと手を握り、シャルルはブンブン手を振った。

「ヨロシユー・マコトー！」

「よ、宜しくお願ひします……シャルルさん」

「ノンノンー・シャルルでおー！」

フレンドリーだけれど、漫畫に出て来るエセ外人のようでなんか喋り辛い人である。

「ワターシ、ニッポン文化に興味シンシンで留学してマーシタ！ゼビ、知らない事あつたら御教授願いたいデス！」

「留学？おいくつですか？」

「イターチ！大学生デス！」

「二十歳？」

「そう！ハターチ！早速の御教授、感謝デス！」

少し話し辛いが、しかし話し易いとも真は思つ。親しげにドンドン話題を振るタイプ。言葉が不自由でも、慣れれば良い付き合いができるそうだ。

「ニッポン文化イイですヨネー！」のコタカもチョベリグデース！」

「浴衣、ですよ」

「ソウ！ユカタ！」

何だか付き合ひのコシを覚えてきた真。ついでに浴衣の謎も解けた。

単に日本好きなだけだ。

変なコスプレで街に繰り出せうとした時は止めてあげよう、と真はどうでもいい決心をした。

ところで気になるもう一つの謎。

シャルルはなんの妖怪なのか？

赤い眼に金髪、すらりとした長身、きりりとした顔立ち。喋らなければ絶対モテる。これが妖怪としての彼の特徴なのだろうか？そ

れより海外に妖怪つているのだろうか？

純粹に氣になり、真は親しげに尋ねる。

「シャルルはなんの妖怪なんだ？」

「ヴァンパイア！『吸血鬼』、と言つたらイイんでシヨーカ？」

真は自分も名前をよく知るその種族におお、と驚いた。吸血鬼、その響きにロマンのようなものを感じる真である。

まあ、田の前の浴衣姿の吸血鬼に多少幻滅はしたが、イメージぶち壊しだ。

そんなロマンを田の前に、真は多少ワクワク質問した。

「血とか吸うの？首筋がぶりと」

「大概レバーとか喰つてます」

がっかりである。

レバー喰つてる吸血鬼、なんかがっかりである。まあ、血を吸う人が近隣住民というのも嫌だが。

そんな感じで微妙な表情を浮かべる真に、シャルルははあと溜め息をつく。そして不満げに語り出した。

「マコート……君が吸血鬼にナニを期待してるのは分からへんけど、勝手なイメージを押し付けないで下サーイ」

シャルルに注意された真は思つた。

(分からへん……？関西弁？)

あんまり眞面目に聞いてなかつた。

「ワターシだつて、血を見ればクラッヒシマース。夜十時には眠くなるし、毎朝講義がある時は五時起きトース。なのにナンテ勝手に『吸血鬼は夜の眷属』みたいなイメージ押し付けトンねん」
(がつかりな上に……何故エセ関西弁?)

真はあんまり注意が耳に入らなかつた。

「いいデスか? 勝手なイメージの押し付け、ヨクナイ! 吸血鬼は、ニッポンみたいに、スシ、ニンジャ、サムライでは語れないのテース!」

真は思つた。

(あんたのも勝手なイメージじゃねーか!)

ヒカルが言つた。

『おい! 萌えが抜けてるぞ!』
「お前も黙つとけ!」

最後にシャルルが言つた。

「……全部ウソデース!」
「おい!」

真は突つ込んだ。

「だから、夜中にちょっと血を吸わせてもらいにいくかも知れませんのでヨロシクー！」

「……え？」

シャルルはバタンと扉を閉めた。

あとで「あれウソーデース。イツツア ジャパー ズジョーク！現代吸血鬼は血とかあんまり吸いまセーン！」と言いながら、部屋にシャルルが尋ねてきたのは、真がニンニクをスーパーで買ってきたとのことである。

真は無言で買ってきたおのじニンニクをシャルルの皿にぶち込んだ。

悶えるシャルルを見て、真は確認した。

「ニンニクは吸血鬼に有効、と」

多分、その攻撃は誰にでも有効である。よい子は真似しちゃいけない。一人が仲良しだから許されるのだ。いや、仲良しでも許されない。

要はよい子も悪い子も真似しちゃいけないよ

その4『吸血鬼のシャルル氏』（後書き）

（本日の現代妖怪辞典）

【吸血鬼】

毎度お馴染みの西洋妖怪。夜の眷属、血を吸う悪魔、昔からよく知られる大妖怪。しかし今ではすっかり落ち着き、血を飲まなくとも、日光があつても、流水があつても怖くない。弱点が大分そげ落ちました。現代の医療は凄いのです。でも個性が欠けて、代わりに貧血気味な人間みたいになりました。それでもやっぱり力持ち、なかには変わった力を持つ者も？ 血を吸うと本性を表す吸血鬼も居るとか。やはり腐っても大妖怪。いえいえ腐つてませんけど。

これは現代妖怪辞典です。実在の妖怪とは何ら関係はありません。
本当の吸血鬼はこんなんじゃないよ！

吸血鬼のシャルル氏。エセ外国人の不思議さんです。ちなみに、英語っぽいこと話していますが、名前はフランス語読みです。ニンニクは臭くて駄目で、十字架は先っぽが尖っているから怖いそうです。先端恐怖症です。吸血鬼あんまり関係ないです。

しばらくは登場人物紹介的展開。でも、そのしばらく内に住人全員が出るわけではないですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0957x/>

しあわせ荘の日常

2011年10月9日07時23分発行